

「特集」

鳥取・智頭町

杉がつなぐものがたり

文＝瀬戸内みなみ

20 杉ものがたり PART 1
杉と生きる

28 COLUMN 杉木立に広がる民話の世界
智頭町・みたき園へ

30 杉ものがたり PART 2
杉を活かす

38 杉がつなぐものがたり・智頭の地図



杉神社（38頁）を管理する智頭町森林組合が手がけた智頭杉の重箱。緻密な木目が美しい

12 Interview しなやかな挑戦 文＝森綾
山本容子 〔銅版画家〕

52 新連載 建築トライアングルツアー 文・画＝宮沢洋
自然と生きる建築 〔滋賀県近江八幡市ほか〕

7 京都の路地まわり道 文＝千宗室
庭の水鏡

9 ひとときエッセイ「そして旅へ」
文＝ふかわりょう
カリフォルニアの空

11 諸国名産お国言葉採集
文＝篠崎晃一
あんじょう 〔滋賀県〕

41 柳家喬太郎の旅メシ道中記
梅月堂のシースクリーム

43 新幹線で建築さんぽ 文＝甲斐みのり
浜松市鴨江アートセンター 〔浜松駅〕

44 地元エール これ、いいね！
撫川うちわ 〔岡山市〕

46 おいしいもんには理由がある 文＝土井善晴
釣果味わう海釣りチャレンジ 〔千葉県安房郡鋸南町〕

56 サンキュー！マイ★スター
文＝サンキュータツオ
津留安郎 〔木樽蒸留器職人〕

60 旬 News & Topics

62 美 Art & Entertainment
遊 Event & Festival

64 旅の小箱 from J R 西日本、J R 東海

66 大阪・関西万博プラスワントリップ
観光列車「はなあかり」で行こう！

67 せつかく万博に来たなら！
プラスワンで和歌山満喫旅へ

68 兼六亭の朝食から始まる金沢旅
新幹線で九州・熊本へ

69 夏に楽しむ入吉・球磨エリア
「PLUSTA東京八重洲中央」がオープン

70 ホテルアソシア高山リゾートで過ごす
くつろぎの時間

71 初夏のしつらえと緑に触れる、
京都の癒やし旅

73 奈良を学び、楽しむ「やまとみちの会」
2025年度会員募集中！

75 ひととき倶楽部
読者からのお便り
今月のプレゼントなど

76 次号のお知らせ

78 北海道・山陽新幹線時刻表



智頭杉と因州和紙とで作られた「木のえほん」。3巻は主人公「因幡の白うさぎ」が鳥取のさまざまな風景に出会う物語
写真＝阿部吉泰（上も）



鳥取県南東部に位置する八頭郡智頭町。
県内三大河川のひとつで日本海へと注ぐ
千代川の源流のまちであり、
古くから林業、中でも杉の造林が盛んな
「杉のまち」としても知られています。
現在もまちの面積の約9割が森林。
寒暖差のある気候と伝統的な造林技術で
育てられた「智頭杉」は、
均一な木目と淡い紅色の心材が美しく
建築材として高く評価されています。
古来、杉を財産とし、林業を核とした
景観が守られてきたこのまちで、
自然とともに生きながらその恵みを
活かすひとびとの営みをご紹介します。

文＝瀬戸内みなみ
Setouchi Minami

写真＝阿部吉泰
Abe Yoshitaro

特集

鳥取・智頭町

杉がっなぐ ものがたり

市街地に近い牛臥山(うしふせやま)中腹から智頭の町並みを望む。周囲には1,000メートル級の中国山地が連なり、杉林の合間から見える町は隠れ里のようだ

杉ものがたり ▶ PART 1

杉と生きる

天然林とともに、明治時代に植林された100年を超える杉の人工林が豊富に残る智頭町。国の重要文化的景観にも選定されているその景色は、江戸時代から続くひとびとの林業の営みから生まれたものでした——。

他地域と比べ、樹齢70～80年以上の森林が多い智頭町。一方で林業の衰退も課題になっており、町では林業の担い手育成にも力を入れている



「杉の樹皮は長い繊維が寄り集まってできており、モモンガはこれを歯で細かく割いて丸めて巣材を作ります。空気の層が生まれて保温性に優れた緩衝材になるのです。この保温性がニホンモモンガの“冬眠しない”特性を助けていると考えています」と小林さん



杉の樹皮は
ニホンモモンガの
巣材になる！

息地を守る行動は、たくさん生き物が暮らす森と山を守ることにつながる。生物が多様であればあるほど生態系は安定し、人間を含む生物の命は守られるのだ。

「モモンガは杉が大好きなんです。杉の葉っぱを、ハーモニカを吹くみたいに持ってパリパリと食べる。杉の樹皮を噛んで割いて、雪の降る冬を越すための巣材をつくる。でも樹木が杉ばかりのところにはモモンガはいない。杉自身にも防衛能力があるから、弱い毒を持っているんですよ。だからそれほどばかり食べているとモモンガも弱ってしまう。近くにいろいろな種類の樹木が少しでないとダメなんです」

小林さんがプロジェクトを通して実現したかったのは、「モモンガの生息地保全のビジネス化のモデルをつくること」だ。モモンガが生きていけるような、自然林が混じった杉林は、林業を生業とする地元のひとたちにとっては効率的ではない。それでもなお協力を得るためには、「生息地保全をする」と経済的な利益が生まれる仕組みでなくてはならない。

また人と社会と自然との共生を目指して環境保全とビジネスを学ぶ公立鳥取環境大学の学生たちにとっても、このプロジェクトは将来の職業や起業を考えるきっかけになるかもしれない。

地元有志と学生を巻き込んで、モモンガ型の杉のコースターやモモンガTシャツな

智頭駅前「智頭町総合案内所 暮らし屋」で芦津モモンガプロジェクトのグッズを発見。杉のペンスタンドとウェルカムボード。地域と公立鳥取環境大学の有志が制作している



どのモモンガグッズを次々につくってSNSで発信・販売。さらに県内外のひとを対象に、森をガイドするモモンガ・エコツアーも企画した。地元の敬老会や夏祭りや、婦人会が考案・販売したモモンガ焼き（今川焼）も大好評だったそうだ。

モモンガが暮らす芦津地区にはひとが植えた杉があり、その奥にはパッチワークのように天然の森が残っている。モモンガがどうやって生きているかという生態系を知ること、その山がどれほど豊かであるかを知ることでもあるのだ。

そうやってひとびとはもう一度、山に宝を見出すことができる。

私たちに恵みをもたらしてくれる山にまっすぐに向き合えば、それはまた恵みとなって返ってくる。人間にとっても、モモンガにとっても。

智頭杉の良さを引き出す

雪深い山でゆっくりと成長する智頭杉は、年輪が緻密で木目が細かい。また心材と呼ばれる木の中心部が、優美な淡い紅色をしているのが特長だ。しかも、樹齢60年から100年以上の優良な大径木だいきいぼく*を揃えることができるという。

江戸時代から営々と植林を続けてきた山で、手間をかけて育て、守ってきたからこそ。子の代、孫の代を思いながら100年前に苗木を植えたひとが、まさに望んでいたことだろう。

また町内には「石谷林業 智頭原木市場」があり、木材の流通に大きな役割を果たしている。智頭をはじめ、西日本各地から原木が集まって月に3回、競りを行うのだ。木を単なる製材の材料として扱うのではなく、木としての美しさや建築に活かせる堅けん



ウッドブラインドには年輪が詰まって柂目の整った材を使用。年輪に対してほぼ垂直に切り出す



智頭杉と因州和紙でできた「木のえほん」はヒョウデザインひょうでざいんの白岡 彪ひょう（ひょう）さんが38年前に制作した同作品（左上）の復刻新装版。反り返りなく7ミリという薄さに製材できるのは杉を知り尽くした経験と技術があるからこそ。1冊4,950円（セット販売あり）



サカモトの4代目・坂本晴信さん。樹齢80年以上の智頭杉を用いた内装材や家具も手がけており、左の智頭杉の「寄木スツール」は鳥取市のヒョウデザインとの協業。31,900円～



牢ろうさなどを的確に評価できる目利きが正當な価格をつけ、また需要と供給を過不足なく結びつける。原木市場の意義は重要だ。「それでも、『智頭杉』の知名度はまだ高いとはいえません。もっと上げていかなければ。せっかくこれだけのものを先人が残してくれたのですから」

そう話すのは、智頭杉を使った内装材を手がけるサカモトの社長・坂本晴信さん。自ら先頭を切って全国を走り回り、智頭杉を売り込んでいくスーパースールスマンだ。京都の歴史的建造物にも資材を提供し、宮崎の企業と協力してサウナも製作。現在開催中の大阪・関西万博に出展している海外パビリオンにも、智頭杉が使われている。

サカモトが智頭町で製材所として創業したのは約70年前のこと。智頭の杉、檜、そして純国産の木材を、高い技術力で製材してきた。高度経済成長期を経て和風建築が減少し始めてからは、インテリアや木材加工の分野にも進出。なかでも杉の「ウッドブラインド」には注目が集まる。

どこまでも薄く、滑らかに仕上げられた縦のスラットが、室内のわずかな風や人の動きにつれて揺れる。樹齢80年以上の智頭杉から切り出した4メートルもの長さの素材のなかから、さらに柂目の整った最高級品を選びすぐったものだ。窓に差し込む直射日光を遮りながら、反射で柔らかく室内を照らす。それは木漏れ日に包まれている

製造工程で出た端材はアロマチップに。長い時間をかけて大切に育てられた銘木。少しも無駄にはしたくない



平井知事グッズ
(キーホルダー)
も智頭杉製



代表の小畑明日香さん(中央)とスタッフの皆さん。世界的に人気のモンスター育成ゲームキャラクターと鳥取県とのコラボ製品も同社で製作している



表紙に智頭杉を使用した ASNARO オリジナルの御朱印帳。華やかな意匠はレーザー加工機で繊細に彫りこんでいる。4,950円～13,200円



しています。だって前からおかしいと思っていたんですよ。日本で木製品を買っても原材料は『木』としか書かれていない。それってスーパールのキャベツやニンジンが、ただ『野菜』と呼ばれているのと同じじゃないですか」

明るく話す小畑さんのもとで、7人のスタッフが日々製作に打ち込んでいる。いまでは手芸用品だけでなく、御朱印帳など約400種類の製品を展開する。鳥取砂丘の

らくだコースターや、鳥取県知事(平井伸治氏)をキャラクターにしたキーホルダーなど鳥取推しのグッズも人気だ。地元企業のノベルティー製作やOEMも積極的に手掛け、100社以上と取り引きをしてきた。社内でデザインを手掛け、使用するのは自社設備のレーザー加工機とプリンターのみ。それだけで木材が次々に、こんなにも多様な製品に生まれ変わっていく様子は魔法のようだ。できることが限られるからこ

杉のまち 智頭の宝もの

そデザインと工法を工夫している、と小畑さんは話す。加工機にはどうしてもヤニが付着するが、洗浄する手間も厭わ(いと)ない。真摯な思いが杉製品の温かみと重なって、着実にその輪を広げている。

「小さな雑貨でも、材料の木は50年以上かけて育っている。そう思うと製作過程で出るどんな端材も無駄にはできません。智頭のひとたちは、それよりもっと長い年月をかけて智頭の杉の良さを守ってきました。だからこそ私たちもいま、良いものをつくることができているのだと思っています」

タン、タン、タン。雨がひさしを叩く音

智頭林業の展示も！ 旧山形小学校

智頭駅から車で約10分の旧山形小学校は1942(昭和17)年築の木造校舎。13年前に閉校となるも、校舎は智頭の林業に関する展示や、企業や団体の事務所として活用されている。その中の1社「クレコ・ラボ 智頭研究所」では智頭杉を約0.15ミリの極薄にスライスして巻いたストロー(写真下)を開発。智頭町観光のお土産としても人気！



涼と美を兼ね備える逸品

撫川うちわ

岡山市



竹と和紙の細工が融合した伝統工芸の技は圧巻。光にかざすと絵柄の一部が鮮明に浮かぶ。うちわに記された俳句は「ねたまるる 人の園生くそのう」の「ぼたんかな」高井几董くきとう作(右)と「更けるほど 尚高めけり むしの声」作者不明

「撫川うちわは、江戸時代に庭瀬藩^{*1}を治めていた板倉家を通じて、三河から製法が伝わって、庭瀬藩と撫川知行所の武士の間で、内職として広まりました^{*2}」。撫川うちわ保存会「三杉堂」の会長・平松龍四郎^{たつしやう}さんがそう教えてくれた。凛とした美しさが印象的だが、あらためて観賞してみると、さらに圧倒される。涼をとる実用品でありながら、その一本に日本の伝統的な美意識が内包されているよう。なんて粋な世界なのだろう。

まず特筆したい点は、松尾芭蕉らの俳句を一筆書きで書いて、文字を雲の模様のように見立てるデザイン。文字群を2枚の紙に写して切り抜き、糊で継ぎ合わせる「歌継ぎ」と呼ばれる技法が施されている。一方、風雅な絵柄は俳句が表現している内容に即したものの。光にかざすと、花びらや虫かご(写真上)など、絵の中で強調したいポイントが透けて浮かび上がる。これは、絵柄の一部を切り抜いて、色付けをした薄紙を挟み込む「透かし」という技法が効いていて、「歌継ぎ」と並ぶ撫川うちわの特徴である。

文＝神田綾子 写真＝阿部吉泰
Kanda Ayako Abe Yoshihiro

*1 現・岡山市北区庭瀬に陣屋を置いた *2 現・岡山市北区撫川に位置した

おいしいもんには
わけ
理由がある

第79回

文〓土井善晴
Doi Yoshinori
写真〓岡本 寿
Okamoto Hisashi

早朝から船に揺られ、土井
さんが必死に釣り上げたア
ジを握りに！ 自身で釣っ
た魚は格別の味だ 調理協
力＝寿司割烹 なぎさ

千葉県の内房で釣りにチャレンジ！ 海釣りはほぼ初めてという土井さんの釣果やいかに!?

釣果味わう海釣りチャレンジ

《千葉県
安房郡鋸南町》



土井さんの父上・土井 勝さんは『へらぶな釣り 全』の共著書もあるへらぶな釣りの名手。意外にも土井さん自身はほとんど釣りの経験はないそうだが、人生2度目となる海釣りには関心が高いということで、内房アジ釣り企画が実現。出港から2時間、ようやくかかったアジの当たりを楽しむ！

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学副学長。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)、当連載をまとめた『おいしいもんには理由がある』(ウェッジ)など著書多数。

早朝5時、千葉県鋸南町の港で、釣り船

「池田丸」の池田 剛船長と待ち合わせ。

目的は海釣り。取材前は風の強い日が続いて「天候によって船を出せないかもしれない。当日、港で判断しましょう」と、事前連絡を受けていました。実は私、釣り船に乗るのはほぼ初めてで、取材という目的がなければ、こんな日に船で釣りを楽しみたいと思うような良き経験も、情熱もありません。「大丈夫かなあ、出直すという手もあるなあ」と、思っていたのです。

港に行ってみると夜より風が収まり、近くまで船を出してみることになりました。

釣果を求めて、大奮闘！

コロナ禍の折、密が避けられるというところで、自然の中で楽しめるアクティビティーが注目され、ファミリーや女性にも釣りを楽しむ方が増えました。今ではすっかり釣りがブームになっているのです。

鋸南町は東京からのアクセスも良く、週末には大勢の釣り客が訪れます。房総半島の西南部に位置し、東京湾と太平洋に面する地理的な条件から、古くから好漁場と知

られたところです。

良い漁場とは、河川から流れ込む豊かな栄養源(栄養塩類・植物性プランクトン)を餌にミジンコなどの動物性プランクトンが増殖。これを餌にする小型の甲殻類が育ち、それを目当てに磯の魚介が集まるという食物連鎖が健全に行われる海域です。

さて、いよいよ釣り本番。ウインドブレーカーを羽織って長靴を履くと、ほかはすべて船長が用意してくれます。つまり、何にも知らなくても、初めてでも、手ぶらでも、親切に教わりながら、釣りができるのです。船長の指示の通りにライフジャケットをつけて船に乗り込むと、「オッ」と思うほど白いペンキが塗られていて気持ちいい。遠目に見ると池田丸はエーゲ海に浮かぶ真っ白な船に見えなくもない。

船長からアジ釣りの指導を受け、出港。堤防を回り込んで港を出たら、速度を上げます。10分ほど走ったら釣りのポイントに到着。

南側に超巨大な岩石のような台形の島が見えました。勝山漁港から1・1キロの浮島には、大ボッケ、小ボッケという2つの

建築 トライアングル ツアー

旅に「建築」の視点を加えてみましょう。
 建築には地域ならではの個性やこだわりがあり、
 形や素材の理由を知ること、地域の魅力はさらに広がります。
 案内役は建築に詳しい画文家の宮沢洋さんです。

文・画=宮沢 洋

写真=荒井孝治

第01回

自然と生きる 建築

滋賀県近江八幡市ほか

2

3

巡るのはココ！ 滋賀県



このシリーズでは、1つのエリアに1つのテーマを掲げ、それぞれ3件の魅力的な建築を紹介していく。第1回は琵琶湖周辺の建築を「自然との調和」というテーマで巡った。シリーズ初回に琵琶湖周辺を選んだのは、地域性を取り入れた建築の魅力を知ってもらうのに最適な場所だと考えたからだ。

その前に、「モダニズム建築」あるいは「インターナショナル・スタイル」という言葉を聞いたことがあるだろうか。モダニズム建築は産業革命（18世紀後半から19世紀前半）をきっかけに生まれた、装飾の少ないツルピカのデザインだ。工業化の追い風を受け、戦後になるとこの国にもツルピカのビルが立ち並んだ。これを「世界中どこも同じ」という意味

上写真 [1] ラ コリーナ近江八幡。季節により草屋根の表情が変化していく [2] メタセコイアと馬の森。薄板を編み込んだような大屋根。
 版築〈はんちく〉の壁が柱をつなぐ [3] 滋賀県立琵琶湖博物館。空中遊歩道「樹冠トレイル」の丸子船をモチーフとした展望コーナー